



## I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部  
第 10 号  
Sep. 21, 2004

---

### 山形大学教養教育 FD 合宿セミナー体験記

学校教育講座 阿部 茂

何の因果で……、などとは言うまい。いかなる僥幸によるものか、私はこの8月2、3の両日、山形大学教養教育 FD 合宿セミナーに参加する機会に恵まれた。このセミナーに参加しての体験などを紹介してほしいとのご依頼を、本学部の FD・WG から頂戴したので、同セミナーの様子的一端をお伝えするとともに、あらずもがなの感想も申し添えて、責を塞ぎたい。

ことの成りゆきはこうである。山形大学では3年前から教養教育にかかる全学 FD 合宿研修を実施してきたが、今年（第4回）からは学外からの参加希望者も受け入れて開催することとなり、全国の大学に希望を募った。折しも本学の教育検討専門委員会では全学 FD について検討を始めたところであり、そこで同委員会より医学部の北原教授、工学部の平山教授、そして私が参加（偵察？）を仰せつかったという次第である。

研修の内容は大略次の通りである。研修参加者は、第一陣(8/2, 3)、第二陣(8/3, 4)に分かれ、いずれにおいても7人ほどで1班をつくり、I からVまでのプログラムを2日間に亘ってこなしていく。各プログラムは90分間（授業1コマ分）で、担当講師が作業内容を説明し(10分)、与えられたテーマについて班ごとに討議し OHP シートに結果をまとめ(40分)、これを発表し(4分×6班)、全体で討議する(16分)。各班には毎回、回り持ちで司会、記録係、発表係を置き、全体討議の司会・記録も、各班が順次受け持つ。また、各発表に対して全員が5段階で評価をし、集計結果を公表する。

各プログラムのテーマは以下の通りである。

- I 「山形大学のニーズと課題」 山形大学の置かれた状況を分析し、長所、短所、今後の課題などを整理する。
- II 「山形大学をどのような大学にするか」 山形大学の教育機能を十分に発揮するために、どのような理念・目標を持ち、それをどのような方略で、またどのようなスケジュールで実現する

か、を考える。(なお、Ⅱが終わったところで、班の構成員を替える。)

Ⅲ「科目設計1：授業名と目標の設定」 指定された授業について適切な科目を作り、その科目名と学習目標を明らかにする。(「山形大学の個性を発揮する授業」、「地域性と関連する授業：大学と地域の連携」、「21世紀の諸課題に対応する授業」、「倫理性・公共性を培う授業」、「職業意識と労働意欲を培う授業」)(以上、第1日目)

Ⅳ「科目設計2：授業内容の作成」 Ⅲでつくった科目の授業内容(授業の順序、各回の内容、授業方法、媒体、資源など)を設計する。(以下、第2日目)

Ⅴ「科目設計3：シラバスの完成」 Ⅳで設計した授業内容を見なおしつつ、「評価」の項を加え、シラバスを完成させる。

落下傘で突如降り立ったような他大学の人間が、山形大学の課題や将来設計を考えられるのか?などと逡巡してもしかたがない。学内からの参加者といえども、具体的な資料を持参しているわけではないのだ。せいぜい「地方国立大学」といった程度の粗い枠組みのなかで机上案的なものを組み立てていくしかない。

ともあれ、30年ぶりに学生にもどって脳みそを揺さぶられつつ感じたことは次のようなことであつた。

第一。ほとんど見ず知らずの者が、学部、大学、専門のいずれの枠も超えて討議することは初めはごちなかつた。しかし、次第に焦点を絞っていく過程はきわめてスリリングであつた。たいてい積極性をもって参加したわけではないというところは、授業に臨む学生も似たり寄つたりであろうが、授業にこれだけの知的興奮と緊張感を持ち込むにはどうしたらよいかと、あらためて考えさせられた。

第二。とは言うものの、各プログラムで与えられたテーマについて十分な討議をするためには、40分という時間はいかにも短い。討議が佳境にさしかかると終了時間が迫り、そそくさと発表をすませ、若干の討議を経て次のプログラムへ、というくり返りで、消化不良だという印象がつる。息づく暇もなく課題を与える、集団内の小グループ間には競争心を、小グループ内には共同感を育ませるよう仕組む、ハードワークを成し遂げたという達成感を与える、といったことは、集団活動にだらけた感じを生じさせないためのイロハのイかもしれない。しかし、とにもかくにも忙しいことがいいことだという昨今の社会の流れに棹さしすぎてはいないだろうか。

第三。「個々の教員が山形大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業の存在意義、授業設計、成績評価法などについて、あらためて主体的に検討」するためのFD研修に学外者の参加も募るという「商魂」の逞しさ、これはスゴイと思う。「商魂」とは失礼だが、学外から25名の参加を見(全参加者は89名)、とくに山形県内の公私立大学・短大からの参加者が17名にのぼるといふことは、同県内における山形大の存在感を示すものかもしれない。ちなみに、山形県内の六つの大学・短大が連携して地域教育力の向上を図るFD協議会が昨年度発足し、山形大がその中核となっているようだ。

第四。こうした企画を継続的に行っていくことは、二三年で構成員が交替する委員会組織だけでは手に余ることであろう。教育方法等改善委員会とともに高等教育研究企画センターがこの事業を主催しており、運営にあたった委員に訊ねたところでもセンターをぬきにしてこの企画は考えられないとの答えであつた。同時に、学長自身が泊まり込みで参加し、山形訛り(?)丸出しで討議に参加し、深夜まで懇親会で酒を酌み交わすなど、研修にかける一方ならぬ熱意を示していた。研修を継続的に立案・実行する組織と学長の意欲的な関わり、この二つがこの企画を支えているのではないかと思つた。

中期計画において全学FDの実施が避けて通れないものとなつた現在、これをいかに意義あるものとして企画・実行していくのかは、重要な検討課題である。外部への強い自己アピールを伴つたこの山形大の企画はかなり異色なものであろう。それだけにそうした試みと対比して我々はどのような方向を取るのか(例えば、「商魂逞しく」か、それとも「慎ましやかに」か)を想定してみることも、様々な示唆が得られるのではないだろうか。

周知のように、各大学でFDの実績づくりが行なわれている。他大学のFDの動向は気になるところである。私見ではあるが、二つの方向が見られるように思う。

一つは、学部単位ではなく、全学的に取り組む方向である。合宿やセミナーが催され、外部講師による講演を聴き、代表者が発表や報告をするというスタイルである。予算がつき、立派な報告書ができる。FDの担当セクションが明確にされ、全学的なシステムとしてFDが動いて見える…。もう一つは、各学部単位あるいは各学部というよりは、各講座・コース単位で行なわれる日々のFDである。予算は乏しく、システムというよりは教員の個人的な意識改革が基本となっていて、成果は立派な報告書にはならず、外には活発なFDとは映らないかもしれない…。

第一の方向も第二の方向も共に大切なのであろうが、ここでは全学FDより「学部FD」の利点を強調したい。教育人間科学部は、すでに多様な内容の科目を学生に提供している。一学年200名の学生に対し100名を超える教員がいるわけだから、自分の講義や演習、実習や実技、実験の指導がどのように学生の成長に関与しているか考えてみることも意味があるだろう。卒業生として送り出す教育人間科学部の若者にとって各教員の研究や教育姿勢がどう影響するのか、時にそれを見直すのが「学部FD」である。

今年度第一回目の学部FD研修会では、堀学部長の授業姿勢、指導観を知ることができた。多くの感想や意見も伺えた。多様なカリキュラムが同時平行的に進行し、学生は多くの教員の影響を受けて育つ。各教官が若者の心への迫り方を考え直す機会が「学部FD」であると思う。異なる意見、批判を認め合えるのも「学部FD」である。

また教えてください。 —第1回学部FD研修会「私の授業改善への取り組み」に参加しての感想—

国語教育講座 須貝 千里

6月30日に、堀学部長が自らかつて出て、本年度第1回目のFD研修会が開催されました。先生の提案は「一枚ポートフォリオ評価の導入」による授業改善ということでした。資料として添付されていた「理科教育教材研究Ⅱ学習履歴」（一人分）の丁寧な記述には、その学生の熱心な受講姿勢をかいま見ることができるように思いました。（当日参加されていない方のために紹介しますなら、その用紙は「学習前」の問いかけ（開講時）、「各時」の「大切なこと」と「疑問等」、「学習後」の問いかけ（閉講時）というようなことを記入する構成になっています。）

当日も発言したことですが、学生（院生？）の記述内容が概括的すぎるのが気になりました。確かに丁寧に書いているのですが、授業で教えてもらったことを肯定的に短くまとめて書くというような姿勢を感じました。そのことは、「受講後の疑問点等」の記述内容に対して、特に感じたことです。疑問が書かれていないのです。この傾向は授業が回を重ねていってもかわっていないようです。たとえば、第1回目の欄には「現場の教師が皆このように考えられるといいと思う。」とあり、第11回目には「これから問題を作っていく中で選択問題がもっとも難しいと思った。」とあるというように、です。

ここには疑問が潜在していると言ってもよいようにも思いますが、少なくともそれがはっきり

とは書かれていません。ただし、これは、堀先生の授業がどうかということよりも、私の授業が学生と響き合うような授業になっていないという反省ゆえ、そのような感想を抱いたと言った方がよいように思います。

どのようにしたら、学生の疑問を授業の中に解放していくことができるのでしょうか。いや、もしかしたら、堀先生の授業の現場では学生の疑問が解放されているのかもしれませんが、そうだとしたら、なぜ、この用紙にはそのことが記述されないのでしょうか。このような私の疑問は、授業を聞かせる（講義）ことと疑問を抱かせる（演習）こととのあるべき関係はどのようなものなのか、という問題に展開していきます。

一枚の「学習履歴」から受講生全体の問題を論ずるのは行き過ぎかもしれませんが。このことは一人分を添付資料として出された先生の意図を超えたことだとも思います。しかし、たとえ一枚の「学習履歴」であっても、そこから教師と学生をめぐるさまざまな問題が読みとれるように思います。「疑問」をめぐる問題は、私の疑問を次々に誘発していくのですから。

当日は十分に楽しむことができました。有意義な会でした。堀先生、ありがとうございました。今度、「一枚ポートフォリオ」の読み方を教えてください。

---

## お知らせ

### 第2回FD研修会

日時：平成16年10月13日（水）

13:15～14:45

場所：J号館5階 A会議室

提案：榊原禎宏、高橋英児（学校教育講座）

教員養成の方法をめぐる共通性、多様性について実験的な検討をおこない、あわせて大学教員の職能開発について考える。

※内留生、院生、学部生の参加も歓迎します。

### 編集後記

学部のFDワーキングとは別に、大学としてのFDが動き出したようです。大学の検討専門委員会として山形大学でおこなわれた教養教育FD合宿セミナーに参加された阿部先生にセミナーの体験記をお願いしました。

須貝先生の文章は、前号の学部FD研修会特集に掲載する予定のものでした。スペースの都合で掲載が後回しになってしまいました。須貝先生には記しておわび申し上げます。（I）